

グローバル化世界における聖コロンバン会

■キリスト生誕 2000 年祭の集会

1. キリスト生誕 2000 年祭にあたり、ここに集う聖コロンバン会は、最初の完全なる人として創造された息子を救い主として私たちにつかわされた、父なる神の愛に感謝します。聖霊の力により、教会はこの 2000 年間、イエス・キリストの以下の言葉の証を示し、宣べ伝え続けてきました。「主の御霊がわたしに宿っている。貧しい人々に福音を宣べ伝えさせるために、私を聖別してくださったからである。主はわたしをつかわして、囚人が解放され、盲人の目が開かれることを告げ知らせ、打ちひしがれている者に自由を得させ、主のめぐみの年を告げ知らせるのである」(ルカによる福音書：第 4 章 18-19 節)。聖コロンバン会 の宣教師である私たちは、私たちを弟子として受け入れてくださり、全世界で永遠に続くイエス・キリストの使命に加わるよう呼びかけてくださった神に感謝します。

2. 私たちは、聖霊が降臨し、イエス・キリストのもとに和解する世界という神の計画の展望を新たに示してくださるよう祈ります。地球そのものの声を含め、私たちを取り巻く声はみな、和解を強く求めています。キリスト生誕 2000 年祭の精神のもと、私たちは自らの過ちを認め、自分が罪深い人間であることを認めます。そして和解に向けた取り組みに一層の力を注ぎます。

3. 和解に向けた取り組みを効果的に進めるためには、まず世界の現状を正確に理解する必要があります。そうすることで、グローバル社会を分断している勢力が明らかになり、適切な対応を見極めることができます。聖コロンバン会は、過去 3 回の総会でこのテーマについて熟考してきました。私たちは、こうした集会の成果を認識しつつ、今後さらに取り組みを重ねていきます。また私たちは、ここ数年で、自身や自分の住む世界に対する視点を改めざるを得ないような、新しい状況が生まれていることも認識しています。その実態を探ると、私たちがすでに行っているさまざまな取り組みの意義が確認できるだけでなく、聖霊の声を通して、新しく適切な対応の必要性という課題も見えてきます。

■変わりつつある私たちの世界

4. 初期の集会で私たちは、「世界で新たに生まれている潮流の中で、貧しい人々の視点に立って世界を見つめる私たち宣教師の仕事にもっとも大きな影響を与えているのは何か」と問いかけました。それに対する答えは、「グローバリゼーションのマイナス影響」でした。『生き方の選択 (Choosing Life)』が発表されて以降、この現象の重要性はさらにはっきり

してきました。

■ グローバリゼーション

5. 私たちが広義でとらえる「グローバリゼーション」は、全世界でますます明白になってきている、地球の物理的限界を無視した経済統合を指しています。政治的コントロールのおよばないこのプロセスは、国家の政治構造を揺るがしています。今日、世界最大規模の100の経済母体のうち、半数以上が国家ではなく企業です。政治的コントロールのおよばない経済システムは必ず、人間コミュニティの社会機構を崩壊させる残酷な不平等を拡大させます。政治的制約を受けず、社会に与える影響を省みもせず、世界各地で巨額の金を動かす組織の思惑に振り回され、毎年数百万人もの人が、身分の不安定な出稼ぎ労働者になることを余儀なくされています。

6. グローバル経済システムの登場により、新しい世界市場に匹敵する規模および構造を持つ政治的秩序の構築が必要になっています。この課題は緊急な対応を要します。グローバル経済システムが既存の政治構造を、人々の真のニーズのために機能するという本来の意図を外れて、グローバル経済の手先にしようとしているためです。今日、私たちはかつて経験したことのない、文化の「経済化」に直面しています。すべてを市場価格に換算し、換金や売買の対象になり得ない人間の基本的権利を私有化し、個人の好き勝手に扱おうという企てが進められているのです。文化の経済化は、人々の手の届かないところで市場を支配することで、すべての真価を損なわせます。これは今日、私たちの信仰、習慣、アイデンティティに極めて重大な影響を与える要素です。

■ グローバリゼーションが抱える矛盾

7. 緊急の対応を要する環境問題が次々と明らかになり、世界各国の首脳は環境サミットの必要性を認識するようになりました。グローバル経済システムが抱える矛盾が見えはじめ、人々は深刻で実際致命的なその限界を認識せざるを得なくなってきました。

以下にその例をいくつかあげます。

a. 国家政府がグローバル経済システムの規範と需要に従って自国経済を再構成してしまうという、国家そのものが抱える矛盾。今日、すべての経済発展は経済界の国際基盤の強化につながるため、これによって国家という枠組みに過ぎない政治構造は、さらに意義を失うこととなります。

b. 推進派が開かれた世界における自由と個性の尊重をうたう、グローバル経済システムが

抱える矛盾。ここで言う「自由」とは、閉鎖された世界の中で、市場が提供する限られた選択肢の中から選ぶことを意味しています。

c. グローバル経済システムを突き動かしている「ほぼ無限に拡大できる」という理念と、地球は有限であるという事実のあいだの矛盾。彼らは理論上、世界中の人々に先進国の一般市民のライフスタイルを提供すると説いているわけですが、地球の資源は限られており、100億人がこのような生活をするのは不可能です。私たちは、有限な世界の中でどのように共存を図っていくか（あるいは共存せずに死んでいくか）を考えなければなりません。これは、中国など膨大な人口を抱える諸国の将来の発展に関する議論の中で浮上してくる課題です。

d. 私たちの生活に内在する、消費者として求めるものと生産者として拒否すべきものとのあいだの矛盾。私たちは普段、自分を消費者としか考えていませんが、私たちは消費者である以上に生産者です。人々は、消費するために生産しなければならないことは理解していますが、自分が人生の意味を創造する生産者であることはほとんど認識していません。生産者としての私たちのニーズは、消費者としてのニーズとかなり違い、以下のような長期的視野が絡んでいます。

- i) 持続可能性、あるいは後世の価値ある将来を守っているか、それとも壊しているか。
- ii) 連帯性、あるいは経済関係を結んでいる相手に対して公正に振る舞っているか。
- iii) 自然界、他者、そして自分たちに対する義務を果たす必要性。

e. 私たちの世界は閉鎖システムです。その中である一国が裕福になろうとすれば、それは国家間の競争を激化させ、他国を貧困に追いやることでしか実現できず、システム全体の和を乱すこととなります。貧困国が富める国の環境保護主義を机上の空論だと単に笑うだけでは済まず、極端な場合には、解決を求めて自暴自棄になった貧困国が武器を取ることも考えられます。

■ グローバリゼーションが私たちに与える影響

8. 私たちはみな、多くの矛盾を抱えるひとつのグローバル経済に組み込まれています。自分の真の姿を知るために、私たちはグローバル（全体）と個々の関係について理解する必要があります。世界規模のシステムに内在する矛盾は、そこに生じるからです。ただし、誤った大量消費を奨励する文化的世界にどっぷり浸っていると、理解は難しくなります。遍在する市場勢力は私たちに絶え間なく、願望を満たしてやるとささやき続けます。こうしたささやきは私たちに、グローバル化した生産網における他の人々とのつながりを忘れさせます。しかし長い人類の歴史の中で、私たちのアイデンティティを形成してきたのは、

この「つながり」にほかなりません。それは私たちが、自分の経済活動がいまやすべての人に影響をおよぼしているにもかかわらず、その連鎖の末端の存在にうとくなっていることをはっきり示しています。そのような現状の中で、「私たちは何ものか？」という問いに対して道徳的に許容できる唯一の回答は、「私たちは、創造を託されている完全な世界の、未来の市民である」というものです。

■ 課題と希望

9. 私たちの信仰の基盤になっているのは、人々の生活の隅々まで福音が伝わり、すべてのものが福音を体現できるという信念です。そしてもうひとつは、福音に照らした姿がすべてのものの真の姿である、という信念です。私たちは自分も先に述べた混沌としたシステムの一部だと考えています。私たちに与えられた課題は、それを理解し、そこで自分に科せられた義務を受け入れることです。

10. グローバリゼーションはキリスト教徒に斬新な課題を突きつけています。キリスト教徒はいつの時代も、根拠のある希望を持つように言われてきました。第二バチカン会議以降、教会は現代社会の価値観に対してより寛容になりはじめましたが、そのときすでに、これらの価値観の多くは問題視され、揺らぎはじめていました。人々のコミュニティはより細分化され、信仰は個人化されました。消費者の欲に迎合した、グローバル化された単一文化が、それ以外の価値観が破壊されつくした後の空間を埋めていきました。この変化は西洋文化でより顕著に見られましたが、世界中でその影響を受けなかった国や宗教慣習はほとんどありません。

11. その反応のひとつとして現れたのが原理主義です。それはアイデンティティを守り、宗教と社会の関連性を強調する姿勢でもありますが、多くの場合は、日常生活にリスクや曖昧なものを持ち込みたくないという信仰心を反映しています。

12. 今日、教会を含め、あらゆる法人に対して懐疑論が浮上していますが、一方で意義や真実を探る真摯な姿がそこにあるのも事実です。人々、中でも特に世界の主要宗教の信者の多くは、グローバリゼーションの課題に立ち向かう独創的な対応を模索するために、自分たちの伝統的慣習を見直しはじめています。こうした模索の動きは教会の中だけでなく、いずれの公式な宗教法人にも属していない人でも見られます。これは聖霊の存在を示すものです。

13. 2000年の宣教の日、シドニーで聖コロバン会の総会が開かれている期間中に、これまで最大規模の宣教師の集会在ローマで開催され、ヨハネ・パウロ二世が宣教の必要性

と宣教師の仕事について以下のように話されました。「不正、暴力、戦争の根底にあるのは、無秩序な競争、なにがなんでも他者を支配したい という欲望、優越感におごる者による差別、抑制のない富の追求です。」法王は、「私たちは、より友愛に満ちた世界が生まれると信じ、希望を失ってはなりません」、と強く説かれました。</p>

■ 聖コロンバン会の対応

14. 聖コロンバン会は、福音の視点から社会を見つめる小さな予言集団として、以上に述べた現状の中で使命を果たさなければなりません。私たちの仕事は、すべての人を解放する真実を証言し、大量消費主義が描くゆがんだ理想像に疑いを投げかけることです。現在の経済システムが何億人もの人を支えきれないことは明らかです。私たちは、すべてのものを（人の生そのものまでも）市場価格に換算してしまう経済システムの偶像崇拜的性質を暴かなければなりません。このシステムの中では、守り育むよう人類の手に託されたさまざまな生物は、営利活動のために独占され、特許の対象にされてしまっています。</p>

15. 私たちは神の声に従ってイエス・キリストの弟子となり、宣教師になりました。これは神から私たちに与えられたすばらしい贈りものです。私たちに与えられた使命は、自由と豊かな人生を目指す道を人々とともに歩み、その探求を阻むあらゆるものに対して抵抗を促し、生を与える道を提唱していくことです。私たちに訴えかけるのは、十字架上のイエス・キリストと、復活したイエス・キリストの姿です。それは私たちに、徹底して悪に抵抗するよう、今日同じように十字架にかけられている者に味方するよう呼びかけています。